

国際協力研修における新たな「学び」の創出を目指して

—開発教育と他者理解の視点から—

基盤教育院
林 加奈子

1. はじめに

「国際協力」とは何だろうか。ヒト、モノ、カネ、情報のグローバル化は、私たちの生活を快適にする一方で、貧困、環境破壊といった地球規模の問題を顕在化させている。「国際協力」とは、このような世界の不公正を解決するために、この地球に暮らす一人ひとりが手を取り合い、ともに行動していくことである。グローバル化した現代社会に生まれ、これから生きていく学生が将来国際人として活躍していくためには、世界の不公正にも目を向け、それらを解決していく力を身に付けていく必要があるだろう。

1994年に国際協力研修を始めた本学は、中国の貧民街で女子教育を始めた創始者の建学の精神を引き継ぎ、世界の不公正にも目を向け、その解決のために行動できる国際人を育成することを当初から考えていた。ゆえに、草創期の研修にはまず、参加学生個々人が世界と出会い、自らの立ち位置を知り、自身が成長する上での「学び」があった。そして、現在の国際協力研修は、草創期からの「学び」を引き継ぎながらも、世界の不正解決のために必要な新たな「学び」の創出を目指している。

筆者は、2007年から2010年までの4年間、担当者のひとりとして研修の調整と引率に携わった。本稿では、現在の国際協力研修が、どのような新たな「学び」を創出しようとしてきたのかをプログラムづくりの視点から述べるとともに、参加学生に対して実施したアンケート結果をもとに、研修が創出しようとしてきた「学び」が、どのように彼ら/彼女らの「学び」につながっているのかを見ていきたい。

2. 現在の国際協力研修概要

現在、国際協力研修は基盤教育院フィールドスタディーズの科目として、初級編として夏季休暇にフィリピンで3週間、春季休暇にインドで約2週間、また上級編として同じく春季休暇にバングラデシュで約2週間実施されている。筆者が着任した2007年度からは現地研修のみならず、事前学習、事後学習も徐々に充実させ、過去に参加した学生にも手伝ってもらいながら、事前学習8回（合宿、危機管理セミナー含む）、事後学習2回を実施し、基本的にはこれらすべてに参加した学生に2単位を認定している。参加学生にとって事前・事後学習の負担は大きいですが、毎回現地研修と同様、積極的に参加している姿が見受けられる。成績評価はなく、可か不可の判定である。また、帰国後には、希望者は発展研究として「自主研究」を履修可能となっている他、国際協力専攻や他専攻の科目を履修し、専門的な学習につなげることが可能となっている。

3. 新たな「学び」の創出 —開発教育と他者理解の視点から—

3.1. なぜ「開発教育」と「他者理解」なのか

3.1.1. 開発教育

開発教育は、1960年代に南北問題に代表される開発問題の顕在化を背景として、欧米のNGOが自国の人々に対して始めた教育活動である。日本では、1979年に開催されたシンポジウムが契機となり、現在は本学リベラルアーツ学群の科目「国際学インターン」の受入団体のひとつである（特活）開発教育協会を中心に学校教育や市民教育の中で展開されている。

開発教育は、当初は途上国の現状を先進国の人々に伝え、そこから途上国への支援を促すという意味合いが強かった。途上国は「かわいそうな国」であり、援助の対象であると捉えられていた。しかし、1970年代のオイルショックを契機に、世界が相互依存関係にあることが理解され、途上国の問題は、途上国国内の問題というよりは、先進国が支配・収奪する不公正な国際経済構造（その元をたどれば植民地主義に行き当たる）のためであるという認識が高まった。途上国側の貧困に対する先進国側の責任が強調されるようになったのである。このような開発に関する時代背景の大きな変化の中で、開発教育のねらいは、単に先進国の豊かな人々が途上国の貧しく気の毒な人々のことを理解しようとするのではなく、途上国の人々が直面している低開発の状況を掘り下げ、その原因を追及し、さらにその責任はしばしば先進国諸国やその国の人々の側にあるという認識に立って、問

題解決、そしてよりよい世界の実現に向けて、相互協力への関心や態度を養うことであると指摘されるようになってきている¹。前述の開発教育協会は、開発教育を「私たちひとりひとりが、開発をめぐるさまざまな問題を理解し、望ましい開発のあり方を考え、共に生きることのできる公正な地球社会づくりに参加することをねらいとした教育活動である」と定義し、学習者が「知り、考え、行動する」ことの必要性を強調している²。

本研修では、遠い国の出来事、自分とは関係のない人々の出来事と捉えられがちな開発途上国の問題を、自分たちと密接に関係している自分たちの問題として理解し、その問題解決のために参加学生一人ひとりが行動することができるよう、上記開発教育の考え方を取り入れたプログラムづくりをしている。ここに、現在の国際協力研修が創出しようとしてきた新たな「学び」がある。

3.1.2. 他者理解

前述したように、開発途上国における問題の多くは、歴史的、政治的、経済的な先進国と途上国との関係性から起きている。これらの問題を理解し、参加学生の一人ひとりが国際協力を志向していくためには、世界の構造、貧困など、それぞれの問題を掘り下げていく必要がある。しかし、このような問題を頭で理解するだけでは、現場ではひとりよがりになってしまう可能性が高い。国際協力は、人と人が出会うことから始まる。我々はまず、ひとりの人間として現地の人々と出会い、お互いを理解することから始めなければならない。それは、世界の構造や貧困を理解することと同時に大切なことである。なぜなら、国際協力の対象は、我々と同じように、喜びや悲しみ、憤りなど様々な感情を抱きながら、毎日を生きる一人ひとりの人間だからである。我々はまず、現地の人々がどのような生活をし、何を考え、何を感じ、どのような文化をこれまでに築き上げてきたのかを理解する必要があるだろう。彼らを個人として理解しようとするれば、彼らを取り囲む不公正な構造、問題はずっと身近になってくる。

そこで、筆者は、参加学生が現地で出会った人々をただの「かわいそうな人々」ではなく、「自分たちと同じ人間」とであると認め、彼らを個人として理解し、友人が抱えている問題を共に解決していく姿勢を身につけること、そしてこのような直接的な現地の人々との出会いと交流を通して参加学生一人ひとりが学び、成長することを願い、できるだけ現地の人々と接する機会、寝食を共にする機会をプログラムに組み込んでいる。このような取り組みは、草創期からの「学び」を引き継いだものである。

3.2. 国際協力研修全体の学習目標

現在、国際協力研修では、参加学生に学習目標として下記を提示している。

- ① 他者理解・国際交流：現地の人と直接交流することを通して人々を知り、理解する努

力をする事。

- ② 座学では理解することの出来ない途上国の現状、南北格差、貧富の格差等を自分の目で見、耳で聴き、直接当事者たちと話すことを通して考えること。
→ 知らなかった事実を知り、簡単な疑問を持ち、心で感じる事。
- ③ 友人たちの現状と彼らを取り巻く世界の構造を理解し、そこで何が必要とされているのか、自分に何ができるのかを考え、行動に移す事。

3.3. プログラム内容

現在、国際協力研修では、現地研修のみならず、出発前には事前学習、帰国後には事後学習を実施している。以下、事前・事後学習については三研修とも内容が類似しているため、フィリピン研修を事例に、現地研修については三研修それぞれについて述べたい。

3.3.1. 事前学習：フィリピン研修を事例に

事前学習は、出発の2～3ヶ月前から週に一度、全員参加必須として全8回実施している。事前学習を実施する目的は、現地に行き、様々な出来事、人々に出会ったときに感じ、考えることの視点を増やすため、また参加学生が他者との意見交換を通して、これまで自身が有してきた思考や思考方法を一度解放し、新たな価値との出会いから新たな思考や思考方法を形作っていくプロセスを提供するためである³。この過程では、自分たちの生活を見直すことも含まれる。後者は、ワークショップという形で行っているが、ここには過去に参加した学生にファシリテーターとして関わってもらっている。以下、フィリピン研修における事前学習の内容を紹介する。

	内容	ねらい
第1回	自己紹介、課題図書分担、係決め	
第2回	開発教育教材を使用してのワークショップ「マジカルバナナ」実施 但し、日本とフィリピンの歴史的関係、経済的関係も内容に追加	バナナを題材に、フィリピンと日本のある種、構造的な搾取関係について理解し、「かわいそうな国」フィリピンではなく、「自分と密接な関わりのある国」として現地の問題を捉えられるようになること。
第3回	映画鑑賞 ・フィリピン政府観光省によるPR映像 ・「忘れられた子どもたち」あるいは「神の子たち」上映	<ul style="list-style-type: none"> ・フィリピンに対する特定のイメージを取り除き、フィリピンには様々な面があることを理解すること。 ・政府のスタンスを理解すること。 ・スカベンジャーの現状を理解すること。
第4回	課題図書発表（グループ発表）：テーマに合った課題図書を読んで発表 ・フィリピン概要（歴史、日本とフィリピンの関係を重点的に） ・スラムについて ・環境と開発 ・ODA、開発、フィリピン NGO	<ul style="list-style-type: none"> ・課題図書を自分たちで調べ、まとめることを通して、フィリピンに関するアカデミックな知識を身につけること。 ・人前で発表することを通して、責任感や研修参加へのモチベーションを上げること。
第5回	課題図書発表（グループ発表）：テーマに合った課題図書を読んで発表 ・都市研修での訪問団体について ・地方研修での訪問団体について ・在日フィリピン人について ・日本の貧困について	
第6回	合宿 ・ワークショップ ① 開発教育の視点を取り入れたワークショップ、ランキング「貧困から抜け出すためには」 ② 開発教育の視点を取り入れたワークショップ、フォトランゲージ「豊かさとは何か」 ③ 在日フィリピン人講師によるお話、現地語練習 ④ 前回参加者による発表 ⑤ 危機管理について	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップで他者と意見交換することにより、既存の思考や思考方法を一度解放すること。 ・新たな価値との出会いから自分自身を見つめなおし、新たな思考や思考方法を再構築すること。 <p>① 貧困からの脱却には政治経済的なアプローチだけではなく、BHN、文化、環境、平和等の視点からのアプローチも必要であることを理解すること。</p> <p>② 「豊かさ」とは物質的豊かさだけではないことを理解すること。また、自分たちの生活について見直すという視点を持つことにより、現地の生活を相対的に考察する視点を身につけること。</p> <p>③ フィリピンの社会経済状況、歴史について、また日本に暮らすフィリピン人について学ぶこと。</p> <p>④ 前回参加者との交流、学びの伝達。</p> <p>⑤ 自己管理、現地の文化理解について。</p>
第7回	訪問 NGO からの特別講師によるお話（特定非営利活動法人ソルト・パヤタス/ゴミ拾いで生計を立てる人々を支援する日本の NGO）	<ul style="list-style-type: none"> ・現地での注意事項。 ・日本の NGO の活動の理解。 <p>日本とフィリピンの歴史的関係（戦争、日本による占領）、経済的関係について理解し、自分たちとの関係を考えること。</p>
第8回	現地での発表・交流準備	

3.3.2. 現地研修

現地研修は、現在実施している三研修全てにおいて、都市研修と地方研修を有したプログラムとなっている。そして、現地では心と身体、そして頭を使って訪問先の人々について、また彼らを取り囲む現状や構造について理解することを目的としている。尚、現地研修では、毎日実施する「振り返り（省察）⁴」にも力を入れている。現地で見聴きしたこと、感じたことをそのままにしておくのではなく、参加学生と引率者、時には現地の人々とともにその日の出来事を振り返り、みなで共有することにより学びの定着を図り、その後の学習につなげるよう心がけている⁵。

(1) フィリピン研修（初級編）

全3週間のフィリピン研修においては、「環境、貧困、開発」をテーマとし、前半を都市研修、後半を地方研修としている。フィリピン研修は、他二研修に比べ期間が長く、現地の人々と接する機会が多いこと、また現地受入団体の協力により、より開発教育の視点から現地研修がプログラム化されていることが特徴である。尚、現地研修がより開発教育の視点からプログラム化できるか否かは、期間、訪問場所、現地受入団体の協力による。

前半の都市研修は、首都マニラに位置し、本学提携校であるアテネオ・デ・マニラ大学の国際プログラム課（Office of International Program）の協力の下、フィリピンの社会経済状況、貧困状況を体系的に学べるようなプログラムとなっている。後半の地方研修は、2008年度より、フィリピン最大且つ最古（1952年設立）のNGO、PRRM（Philippine Rural Reconstruction Movement）を受入団体とし、地方の抱える問題を環境、持続可能な発展/開発の視点から学ぶものとなっている。

都市研修では、まず同大学開発学部教授より「フィリピンの貧困」と題した講義を英語で行ってもらい、それを頭に入れた上で都市に特有の問題について現場を訪問し、人々と交流する中で学んでいく。ストリートチルドレンや孤児・シングルマザー保護施設でのホームステイ、夜間における路上生活者訪問、スラムでの住居支援団体での家造りのお手伝い、ゴミ山付近に位置している小学校での模擬授業がある。これらはアテネオ大学がアレンジしてくれている。その他には、筆者ら引率者が直接アレンジした、ゴミ山付近に暮らす人々を支援している日本のNGO（特活）ソルト・パヤタスの活動地訪問、独立行政法人国際協力機構（JICA）の事務所訪問、青年海外協力隊の活動地訪問がある。参加学生は、現地の人々と直接出会い、彼らから実際に話を聴くことで、自分の考え方を変えていく。また、研修では、毎日夕方に同大学社会貢献室（Office of Social Concern and Involvement）⁶の協力の下、振り返りの時間を設け、さらなる学習や行動につなげるような働きかけを行っている。

一方、地方研修は、マニラからバスや船を乗り継ぎ、主に漁民の人々と出会う研修とな

る。2008年度及び2009年度はマリンドゥケ州にて、2010年度はバターン州にて研修を実施した。参加学生は現地の人々の家に五泊六日のホームステイをし、彼らの息遣い、文化を体感しながら彼らの生活、取り巻く状況を理解していく。多くの参加学生は、フィリピンに第二の家族を持つようになるほど、ホストファミリーとの時間は濃厚なものとなっている。また、漁民の人々が自分たちの生活と自然環境を守るために行っている海洋資源の管理や漁民組織の活動について話を聴いたり、マングローブの植林や漁業体験をしたりしながら環境と貧困、開発の関係性について学んでいく。マリンドゥケ州が研修地となったときには、日本に輸出された銅の鉱山開発跡地を訪問、普段何気なく暮らしている我々の生活がいかにフィリピンの生活と密接に結びついているのか、現地の自然環境を破壊しているのかを目の当たりにした。

研修の最終日には半日時間をとり、都市研修と地方研修全体の振り返りをワークショップの形で行っている。このワークショップでは、参加学生に、都市と地方で学んだことが有機的に結びつくように、都市と地方の関係性について、またテーマである「環境、貧困、開発」についてグループで話し合ってもらい、自分たちの考えを図にして発表してもらっている（写真参照）。



2010年度フィリピン国際協力研修、最終振り返りワークショップの様子

(2) インド研修（初級編）

約2週間のインド研修においては、「ジェンダー、参加型開発」をテーマとし、2009年度より南インド、カルナタカ州にて、前半を都市研修、後半を地方研修として実施している。インド研修では、期間が短い中で、いかに現地の人々との交流を増やし、参加学生が彼らとの交流から、彼らを取り巻く状況について考える機会を持てるかに配慮している。

前半の都市研修は、州都バンガロールにて、現地NGO、GCSD（Global Citizens for Sustainable Development）を受入団体に、インドの社会経済状況、都市部の貧困状況を体系的に学べるプログラムとなっている。後半の地方研修は、南インド最大のNGO、

MYRADA (Mysore Resettlement and Development Agency)/MYKAPS (MYRADA Kavery Pradeshika Samsthe)⁷を受入団体に、特に農村の女性の現状や彼女たちのエンパワーメント、また同団体が得意としている参加型開発について現場の実践から学ぶプログラムとなっている。

都市研修では、まず受入団体よりインドの歴史、政治経済、貧困状況についての話を聴き、全体像を把握する。このオリエンテーションでは、インドの学習スタイルや伝統儀式を取り入れ、日本とは異なったインド文化も体験できるものとなっている。その後、インドの都市に特有の問題であるストリートチルドレン、移住労働者の子ども、スラム、異宗教間の平和活動、売買春などにつき、現場へ行き、当事者や彼らを支援している NGO のお話を伺ったり、交流を行ったりしている。また、一般の人々である同年代の若者たちと語り、交流する機会を「日本・インドユースフォーラム」として設けている。フォーラムでは、それぞれが自国の問題について英語でプレゼンテーションをし、お互いに意見交換をしている。2009年度は「貧困」をテーマに、本学学生は日本のホームレス問題についてプレゼンテーションを行った。その他に、それぞれの文化紹介や日常生活の紹介、ゲームでの交流を通して、参加学生はインドの若者と友人関係を築いている。

地方研修は、バンガロールからバスで4時間のところにあるマイソール郡 H.D. コーテにて実施している。ここでの研修は、受入団体 MYKAPS がこれまで支援してきた農村女性やその際の手法である参加型開発について、「講義→フィールド→振り返り」というサイクルで行われる。例えば、午前中にインドにおけるジェンダーの状況と農村女性のエンパワーメントについて講義を受けた後は、午後村を歩き、女性たちに直接質問し、話を聴く。村から戻った後は、何を感じたか、何を考えたかを受入団体のスタッフとともに振り返り、疑問があればここで解決する。また、地方研修の特徴として一泊二日のホームステイがあるが、参加学生は二人一組で、時には電気も水道も通っていない農村のインド家庭で一夜を過ごす。インドの人々の母語はまず州の公用語なので、農村地域では英語を話す人は少ないが、学生はことばが通じずとも心を通わせ、現地の人々の優しさ、温かさに触れ、彼らの抱える問題を心で感じ、内面化していくと同時に、大量生産・大量消費に慣らされてしまった自らの生活についても見つめ直す視点を得ている。



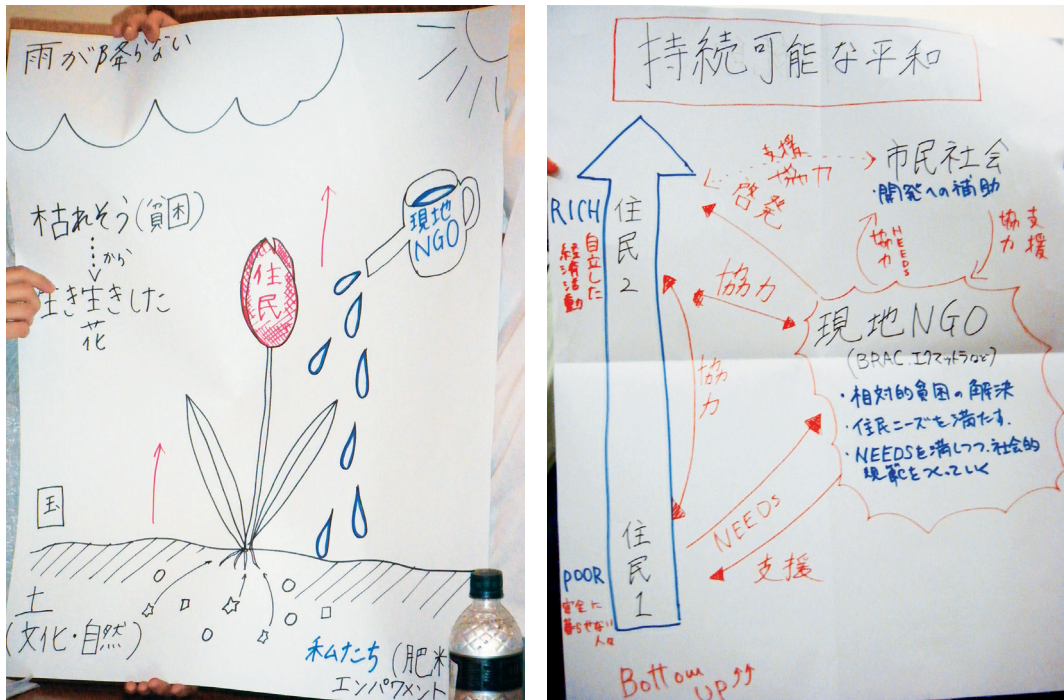
2009年度インド国際協力研修「日本・インドユースフォーラム」の様子

(3) バングラデシュ研修（上級編）

バングラデシュ研修は、他二研修とは異なり、上級編として国際協力をより深く学びたい学生に向けたプログラム内容となっている。期間は約2週間で、受入団体のメインは世界的にも有名な現地巨大NGO、BRAC (Bangladesh Rural Advancement Committee) である。都市研修は首都ダッカ、地方研修はBRACの支部のある様々な地区で行われる。2007年度はダッカから北へ車で6時間ほど行ったところにあるマイメンシン地区にて、2009年度はダッカから車で3-4時間ほどのマニクゴンジュ地区、ガジプール地区にて行われた。

本研修では、BRACの実施するノンフォーマル教育、保健医療、公衆衛生、人権、マイクロファイナンス、最貧困層支援、障がい者支援、ソーシャルビジネス等の社会開発プログラムをほぼ網羅する形で都市と地方の現場を訪問し、当事者の話に耳を傾けることによって、現地の人々の状況、BRACの活動について把握していく。2010年度は、本学提携校であるBRAC大学の協力を得て、サイクロンなどの自然災害に備えるための防災対策プログラムに参加させていただく予定である。

BRACのプログラムでは、現地のNGOと人々が問題を解決するためにいかなる努力をしているのかを中心にしているが、あまりに完璧すぎる活動とその成果に、外部者が関わっていく国際協力の意義が見出しにくいところもある。そこで、現地で活躍するJICAや青年海外協力隊、日本のNGO（特活）シャプラニールの活動も訪問することにより、外部者である日本人がいかに国際協力に関わるべきなのかについても学んでいる。そして、最終日には都市研修、地方研修全体の振り返りとして、「開発/発展、支援とは何か」「現地の政府、NGO、住民、海外援助機関/政府、海外NGOのそれぞれの役割は何か」についてワークショップを行い、グループで国際協力のあり方を考え、発表してもらっている（写真参照）。

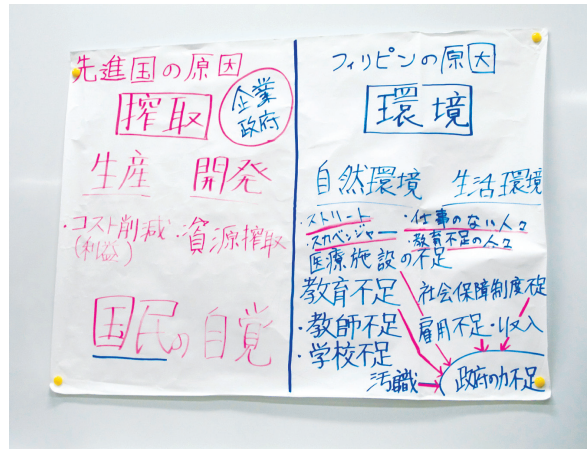
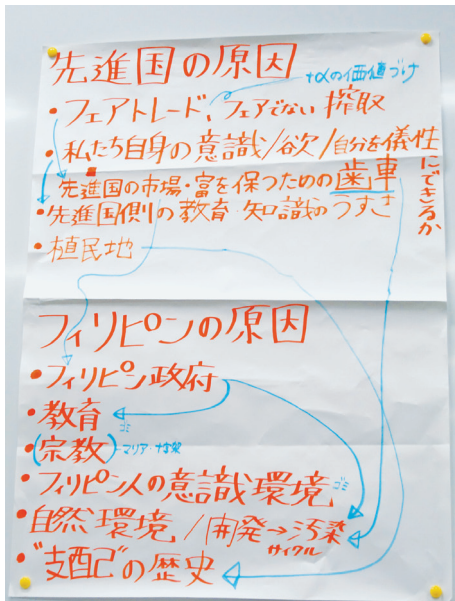


2009年度バングラデシュ国際協力研修、最終振り返りワークショップの成果

3.3.3. 事後学習：フィリピン研修を事例に

帰国後には、全員必須の報告書（日英）作成、報告会実施の他に、事後学習2回をプログラム化している。非日常から日常に戻ったときに、現地での学びを振り返り、定着させること、またそこから現地で出会った人々が抱えていた問題をともに解決するために、自分たちに何ができるのかを考え、実現可能な行動に移すことを目的としている。1回目は、現地での経験を思い起こし振り返るため、学びの共有をする。そして、現地で見えてきた様々な問題の原因を考え、これら原因がフィリピン国内だけにあるのではなく、自分たちとも関係していることに改めて気づいてもらうワークショップを実施している（写真参照）。2回目は、1回目の事後学習で挙げられた問題が存在しない社会とはどのような社会なのか、参加学生の理想とする社会とはどのようなものなのかを考えてもらい、そのような社会を創り出していくために、自分たちには何ができるのかを考えてもらっている。

この他に、前述の通り、希望者には研修への参加を通して、自分が一番関心を持ったことをテーマに、自分の問題意識を明らかにしていく自主研究を履修することが可能となっている。



2009年度フィリピン国際協力研修、事後学習ワークショップの成果

4. 参加学生の学び ―アンケート結果をもとに―

本項では、研修が創出しようとしてきた「学び」が、どのように参加学生の「学び」につながっているのかを見ていく。今回は、事前・現地・事後を通して他研修に比べ、より開発教育の視点を組み込むことができた2008年度および2009年度フィリピン国際協力研修参加学生23名によるアンケート調査（自由記述式）の結果をもとにする。研修参加者は両年度合わせて38名（卒業生除く）であったが、回答してくれたのは25名であった。しかし、うち2名のものについては空欄が多かったことから考察の対象から除いた。

4.1. アンケート結果

(1) 「フィリピン」「途上国」に対する見方、考え方の変化

事前学習開始前には、ステレオタイプ的なイメージを記述したものが多いが、研修（事前学習・現地研修、事後学習）後には、日本など他国との関係性からフィリピンや途上国を捉えなおした記述が見られる。

(a) 事前学習開始前

- ・ 貧しい
- ・ バナナ
- ・ かわいそう

- 怖い
- 笑顔
- 出稼ぎ労働者 など

(b) 事後学習後

- これまでは全く先進国とフィリピンが関係していることを知らなかったが、知ってから他の国でも同じようなことが起きているのではないかと考えるようになった。
- これまでは何となくであった途上国に対する先進国の責任について意識するようになった。「先進国は途上国の犠牲の上に成り立っている」ということが漠然としたイメージから「こういうことなのか」とはっきり意識できるようになった。

(c) 現地研修、事後学習後

- 実際に行くまでは途上国に対してあまり良いイメージはなかったが、その国の良さがあると考えるようになった。フィリピンに対しては、ストリートチルドレンが多く、かわいそうと思っていたが、本当にかわいそうな人たちなのかと考えるようになった。
- 貧困の国というイメージが強かったが、実際はホスピタリティ精神にあふれ、先進国の人々にはないものが多く、学ぶべきことが多かった。

(2) フィリピン研修のテーマである「貧困」「環境」「開発」に対する見方、考え方の変化

「貧困」に対する考え方については、全員が「変化あり」と答えているが、「開発」については2008年度の参加学生が1人「分からなかった」と答え、未回答が兩年度に1人ずついた。「環境」については、未回答1名を除き、全員が「変化あり」としている。

(a) 「貧困」

- 都市のスラムだけが貧困なのではなく、農村での自給自足の生活が崩れてしまうのも貧困。こちらの方が実は深刻で、都市の貧困の原因。
- それまで別の問題だと思っていた環境や教育などと根底で繋がっていること、単に貧しいというイメージから様々な問題が複雑に絡み合って貧困が生まれることが分かった。

(b) 「環境」

- 行く前は環境の何が貧困に関係しているのか分からなかったが、環境の悪化でそれまでの生活スタイルが変わってしまうこと、ある特定の環境があるから生活が成り立っている人たちがいることを知った。
- 先進国で言われる「エコ」という流行の環境ではなく、人々の生死に関わってくるもの。
- 環境問題を考えるときは環境問題だけ見てはだめだということに気づいた。

(c) 「開発」

- 故意に開発を進めて貧困になるという悪循環を生みだしていたのは先進国であった。
- 開発は途上国にとって良いものと思っていたが、開発によって環境の悪化が生まれてしまう。開発は先進国の都合によるもので、先進国によって途上国は左右されている。
- 今まで「開発」という言葉の意味を経済的一面からしか捉えていなかったが、教育などを通した「人間・社会開発」があることを学んだ。
- ただ支援に行くことがよいと考えていたが、現地の人々のことを考えて行うことが、一番大切だと考えるようになった。

(3) 「国際協力」に対する見方、考え方

3名の「変化なし」を除き、20名が「変化あり」と回答している。「変化なし」については、元々国際協力は先進国と途上国がともに問題解決をしていくことと考えていたとの由。

(a) 研修前

- 考えたことがなかった。
- 先進国が上の立場で、途上国が下の立場。
- 先進国と途上国は関わりを持たないものと考えていた。
- 支援や NGO が先進国から途上国に行くというイメージ。

(b) 研修後

- 国際協力は、人と人との関わり合いであるのだから、本来対等であるべきだと気づかされた。援助というよりは、横一列に、同じ目線に立って一緒に考え、協力するという視点、考え方が必要。
- 力構造を出来る限りなくすべき。
- 途上国にある問題も日本にある問題も本質は同じであることが分かった。先進国→途上国に支援するという分野での国際協力もあると思うが、同じ問題を共に解決し、その解決策を共に考えていくこともできると思う。

(4) 物事全般に対する自分の見方、考え方の変化

全員が「変化あり」としている。

- 前より現実的に物事を考えるようになった。
- 固定観念ばかりにとらわれていたが、色々な観点から見ようになり、発言に責任を持つようになった。
- 千人いれば千の価値観が存在する。一般的に言われていることでも、自分自身で確かめるまでは本当のことは分からないということを学んだ。

- ・「AはBである」という見方が減った。色々な意見を自分の中に取り込んでから意見を発するように努めている。生活スタイルが変わった。
- ・今までは情報を鵜呑みにしていたが、「なぜ？」と疑問に思うことが増えた。

(5) 新たな見方、考え方に基づいた意思決定や行動

21名が「している」と答え、1名が「就職活動のため今はできていないが、終わったらもっと勉強して人に伝えられるようになりたい。」と答えた。また、他の項目で「勉強や物事に対する意欲は上がったか」を聞いたが、全員が「上がった」もしくは「もともと意欲はある」と答えている。

(a) 「国際協力」に関すること

- ・国際協力の授業をとるようになった（NGOでのインターン含む）。
- ・フィリピン台風被害に対する学内での募金活動。
- ・環境系の学生サークルに入り、活動を始めた。
- ・学園祭でのブース出展。
- ・学内「国際協力フェスタ」「写真展」の企画、運営。
- ・人身売買被害者シェルターでのボランティア。
- ・留学生や外国人の日本語学習補助のボランティア。

(b) その他：自分の生活や勉強に関することなど

- ・勉強するときや物事を考えるとき、浅くではなく深く、理由もしっかり考えるようになった。
- ・前より本を読むようになった。
- ・前より勉強するようになった（語学含む）。
- ・セミナーや講演会に行くようになった。
- ・ゼミでフィリピンと日本企業のことを調べることにした。
- ・途上国の人に対する考え方が変わり、自分何ができるかを考えるようになった。
- ・国内の問題に目を向けるようになった。
- ・日本についての勉強。
- ・日本の路上生活者に対するボランティア。
- ・行動的になった。前より学校に来るようになった。
- ・宗教を否定しなくなった。
- ・選挙に行った。新聞をとった。実家に帰った。
- ・買い物の仕方が変わった。

(c) 今後さらに具体的に実施しようと思っていること

- ・国際協力専攻だけでなく、社会学や文化人類学専攻などの学生ともディスカッション

ンしてみたい。

- 環境をテーマにした国際協力団体で学外の活動をしたい。
- 様々な NGO でのボランティア。
- 他の地域も見てみたい。
- 警察官か厚労省の公務員になって、制度作りに関わりたい。
- 留学。

(6) 参加学生、現地の人々が与えた影響

物事に対する見方や行動の変化に下記の人々の何が、どのような影響を与えたかを聞いた質問では、下記のような回答があった。

(a) 参加学生

- ディスカッションや振り返りでの意見。
- 自分との考え方の違い。
- 集団行動の大切さ。
- 新しい視点を得られた。
- 柔軟になった。
- 自分の意見を言えるようになった。
- 自分だけの意見では分からないことがたくさんあるのだと感じた。
- シェアをすることで、自分の考え以外のことを聞けるきっかけになった。
- 授業で学んだ言葉で話す→自分たちの言葉で話す→互いに話し、共有をする。
- もっと論理的に、深く考えられるようになった。色々な視点があるが、それは一人ひとりの今までの生き方や家族関係などが影響していることを知った。
- 何かをやろうとするとき、賛同してくれる仲間ができた。

(b) 現地の人々

- 現状を打開しようとする彼らの力強さ。
- 宗教観、家族観。
- フレンドリーさ。
- 直接交流し、生の声を聞いたこと。
- 世界のどこかで誰かが困っているというのではなく、「○○に住む△△さんがこういう問題にぶつかっていて困っている」と、もっと身近に問題を見ることができるようになった。
- 壁があって遠い国の人たちというイメージ→自分たちと違う国の人だけど、自分たちと何ら変わりがない普通の人→身近な存在として思うようになり、他人事だと思わなくなった。

- 援助という形で関わるのが正しいのかどうか。

(c) その他の影響、原動力

- 目標が明確になったこと。
- プライド。
- 自分に対する期待。
- 引率の先生の態度、ことば。授業のような先生と生徒として話を理解しようとしていた→経験者が現地で話す内容に厚みを感じた→常に受け取るのではなく、自分から発することをするようになった。
- 今までよりも国際協力の問題を身近に感じるようになったこと。現状を現地に行ってみて、それに対して自分ができることは人に伝えること、自分がかんばること、それぐらいしかないと考えたときに、今自分ができるベストをしないといけないという責任感や義務感もある。
- 想いだけでは変わらないと思った。
- たくさんの経験や勉強をさせてもらったから、それを返していきたい。
- 行く前に抱いていたイメージと、現地で人々と触れ合っただけで感じたことに大きなズレがあったから。

4.2. 考察

以上のアンケート結果より、まず参加学生の大半が、物の見方や考え方を変化させているのが分かる。また、「貧困」「環境」「開発」といったアカデミックな事項についても掘り下げをしていると同時に、各々のつながりや世界の構造についても理解するようになっている。これらは現在の国際協力研修が目指してきた新たな「学び」の中身と言ってよいだろう。だが、これらの学びが表層的に、機械的に得られたのではなく、現地で様々な人々と出会い、意見交換や交流をしたこと、参加学生同士で話し合ったことにより得られたことが学生の記述から理解される。ここからは、現地の人々を自分たちと同じ人間として受け入れ、共に歩いていこうという姿勢、そして学生自身が成長していったことを感じることができる。このような「学び」は、草創期から受け継がれてきたものである。

また、アンケート結果からは、研修全体を通して得た「学び」を個々人が生かし、さらなる「学び」につなげていこうとする姿勢が見受けられる。それは日常の生活の中でできることや学習に関することであったりするが、参加学生は自分の個性や関心に沿って、ひとりではできないこと、あるいは仲間とともにできることを実践している。

5. おわりに

本稿では、現在の国際協力研修の新たな「学び」の創出、そして、このような「学び」が参加者の「学び」にどのようにつながっているのかを参加学生に対するアンケート結果をもとに見た。ここからは、参加学生が草創期から受け継がれてきた、他者を理解し、大切に思う気持ち、そしてともに学び合い、自身が成長していくという「学び」と同時に、世界の現状や構造、問題のつながりを掘り下げ、途上国の人々とともに問題を解決していくために必要な「学び」を習得していることが見出された。2007年からの4年間、新たな段階に入った現在の国際協力研修は、草創期からの「学び」を引き継ぎながらも、さらなる「学び」を創出してきたと言えるだろう。

だが、前述の通り、今回のアンケート対象者は限られている。今後は、他研修についても同様のアンケート調査を実施し、研修をさらに良いものとしていくために、研修内容を吟味していくことが求められる。

注：

- ¹ 山西優二「開発教育」岩間浩・山西優二『わかちあいの教育―地球時代の「新しい」教育の原理を求めて』近代文芸社、1996年、210-211頁。
- ² 開発教育協会ホームページ <http://www.dear.or.jp/de/qa01.html> (2010年10月6日閲覧)
- ³ 既存の思考や思考方法の解放については、アメリカの成人教育学者であるジャック・メジローの意識変容の学習を参考にしている。Jack Mezirow, "How Critical Reflection Triggers Transformative Learning," Jack Mezirow and Associates, *Fostering Critical Reflection in Adulthood*, Jossey-Bass Publishers, 1991
- ⁴ 振り返り/省察については、パウロ・フレイレの「意識化」、ドナルド・A・ショーンの「省察」を参考にしている。パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』小沢有作/楠原彰/柿沼秀雄/伊藤周訳、亜紀書房、1979年、ドナルド・A・ショーン『省察的实践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』柳沢昌一、三輪健二監訳、鳳書房、2007年。
- ⁵ 海外体験学習における振り返り/省察については、拙著「開発教育としてのスタディツアー再考―省察と行動の視点から―」開発教育協会『開発教育』57号、明石書店、2010年を参照されたい。
- ⁶ アテネオ大学では、全学生にボランティア活動を義務付けているが、その活動を中心に担っているのがOSCIである。OSCIはアテネオ大学学生に対しても振り返りを実施しており、そのスキルを用い、本研修でも毎日振り返りワークショップを行ってくれている。
- ⁷ MYKAPSは、もともとMYRADAの支部で、設立当初の目的であったチベット難民の定住化を現場で支援してきた。チベット難民定住化以降は、インド南部4州の農村に暮らす人々に対する支援に活動の中心をシフトしてきたが、MYRADAに対する海外ドナーの資金提供終了を機に独立。現在は独自に国内、海外の人々に対してキャパシティ・トレーニング等を実施している。現在、MYRADAとはパートナー関係にある。

【参考文献】

- ・ ドナルド・A・ショーン『省察的实践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考―』柳沢昌一、三輪健二監訳、鳳書房、2007年
- ・ パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』小沢有作／楠原彰／柿沼秀雄／伊藤周訳、亜紀書房、1979年
- ・ 林加奈子「開発教育としてのスタディツアー再考―省察と行動の視点から―」開発教育協会『開発教育』57号、明石書店、2010年
- ・ 山西優二「開発教育」岩間浩・山西優二『わかちあいの教育―地球時代の「新しい」教育の原理を求めて』近代文芸社、1996年
- ・ Jack Mezirow, “How Critical Reflection Triggers Transformative Learning”, Jack Mezirow and Associates, *Fostering Critical Reflection in Adulthood*, Jossey-Bass Publishers, 1991

国際協力研修のあゆみ（年表）

年度	夏期	人数	春期	人数
1994	第1回マレーシア研修（OISCA）	20		
1995	第2回マレーシア研修（OISCA）	20		
1996	第3回マレーシア研修（OISCA）	23	第1回バングラデシュ研修	14
	インドネシア研修	24		
1997	第1回フィリピン研修（OISCA）	24	第2回バングラデシュ研修	6
			第1回インド研修	35
1998	第2回フィリピン研修（OISCA）	20	第3回バングラデシュ研修	12
			第2回インド研修	16
1999	第3回フィリピン研修（OISCA）	24	第4回バングラデシュ研修	15
			第3回インド研修	15
2000	第4回フィリピン研修（OISCA）	22	第5回バングラデシュ研修	14
			第4回インド研修	14
2001	第5回フィリピン研修（OISCA）	24	第6回バングラデシュ研修	14
			第5回インド研修	0
2002	第6回フィリピン研修（OISCA）	23	第7回バングラデシュ研修	18
			第6回インド研修	0
2003	フィジー研修（OISCA）	23	第8回バングラデシュ研修	14
			第7回インド研修	13
2004	第7回フィリピン研修（OISCA）	21	第9回バングラデシュ研修	13
			第8回インド研修	12
2005	第8回フィリピン研修（OISCA）	24	第10回バングラデシュ研修	13
			第9回インド研修	8
2006	第9回フィリピン研修（OISCA）	10	第11回バングラデシュ研修	10
			第10回インド研修	16
2007	第10回フィリピン研修（OISCA）	17	第12回バングラデシュ研修	25
			第11回インド研修	21
2008	第11回フィリピン研修（OISCA）	18	バングラデシュ研修中止 インド研修中止	
2009	第12回フィリピン研修（OISCA）	21	第13回バングラデシュ研修	10
	カンボジア研修		第12回インド研修	16
2010	第13回フィリピン研修（OISCA）		第14回バングラデシュ研修	
			第13回インド研修	